三　「文化の型」とは何か——総括報告——

西山　第三の「文化における型とは何か」ということの総括報告に入ることにいたします。

そこで三の「文化における型とは何か」ということの総括報告をまず私が、たたき台というような意味で申し上げまして、そして皆様方の御批判とそれから皆様方御自身の型論というのをお話いただきたいと思います。私は「文化における型」と申しますのは、これは宗教でも芸術でも科学でも、広く文化一般の全分野におきまして考え方とか、感じ方、或いは表現法などの「かた」というものがあると考えられると思うのです。それよりももっと原始的に、言葉というものもやはりこれは、音声の「かた」を共同理解し合って成立しているわけですから、それも「型」といえると思うんです。だから言も、言の葉の言葉も『聖書』の一番初めにありますように、そういう「型」というものであろうと思いますが、日本語の考えかた、信じかた、感じかた、表現のしかた、話しかた、食べかた、飲みかた、歌いかたなどの「かた」というのは、日本語では無限に「かた」があるわけです。そういう「かた」はつまり感じかた、というと、感じる方法論。それから、書きかたというのは書く方法、つまりそういう方法というものが、「かた」という風に日本語では考えられてきていたと思います。だから日本語の「かた」というのは、中国から来ました漢字の「型」が示すような概念の前に、非常に広い意味の「かた」というものを持っていたように思います。ですから、それは法則性というものでありますし、その法則は、規範であるわけです。だから、話し方、といったことなどは、言葉のその話し方でありますし、そういう規範でありますが同時に日本語というものは、我々はそれが一つの「かた」で話しているわけですが、これはもう日本語からぬけ出すわけにはいかないという一つの拘束性をもって

いる、という意味で「かた」は法則性であると同時にまた規範性であり、拘束性をもっているようなものが、「型」というものであろうと思うんです。こういう「型」は、スタイルとかタイプとかいう「型」の概念よりは非常に広い意味の「かた」ということであろうと思います。つまり法則性とか規範性とか拘束性になっておりますようなそういう「かた」がいろんな風土とか或いはそれぞれの文化のジャンルにおきまして、パターンとかスタイルとか或いはタイプとかいうかたちで、非常に厳密に細かい方向に進展すると思います。そうして「型」という文字でとらえられるようになっていくのだと思います。そしてまた、鋳型とか、或いは歌舞伎の型とか能の型とかいったような、そういう一つの文化の本当に固定的になりましたようなそういうものも一つの「型」という定型的な「型」があるわけでございますし、それから浮世絵のようなジャンルピクチュアーといわれる、これは福原麟太郎先生から私が伺ったんですが、西山君、浮世絵という英語を知ってるか、浮世絵というのはジャンルピクチュアーというんだよ、と。そういうつまり版画、浮世絵というものはまさに一つのジャンルという、そういう「型」、そういうものも私は固定的な何十枚かというものが一つの型として、絵が出来ているような、そういうものがあると思います。でありますが、そういう非常に広い意味で私は「型」というものがありまして、それが後進国であります日本では、中国から「型」という字がはいってまいりますと、今度は非常に窮屈なものの考え方の「型」というものに訓練されることになりまして、そして、先程田中さんのおっしゃったような、日本人がもっております独特の「型」というものがやはりあると思うんですけれども、そういう「型」は中国文字では表現できない一つの「型」として、やはりあるように思います。それは、日本のみならずギリシャにもロシアにもフランスにもイギリスにもきっとあるんじゃないかと思いますけれども、まあそういう意味で「型」は非常に広い分野に法則性、或いは拘束性として存在しております一つの文化のあり方というものだと思います。で、先程申しましたような、非常に定型的な「型」に対しまして、また、無い、ということが一つの「型」になっているというようなものも、これも、「型」といえるんじゃないかと思うんです。つまり日本には、絶対神というものがなくて、相対的に何でも神様というものになってしまいますので、キリスト教

のような神とか、中国の天帝といったような存在が日本人には無いわけです。だから天皇が現人神などということになるのはあれは絶対神がないからだと思いますが、同時に田中日佐夫さんが『芸術新潮』に書かれましたように、古代の天皇に肖像、日本の支配者には肖像画が全くないわけですね。まあ中国に行ってみますと、秦の始皇帝でも漢の高祖の劉邦のあの肖像でも立派な肖像画がありますし、そういう彫刻なんかもあったのではないかと思いますが、日本には全くありません。それから、この間私は、木下順二さん、山本安英さんの「言葉の勉強会」というので話せというものですから「聴くせりふ」という話をしたんですが、その時に私は日本の「せりふ」には、「空白のせりふ」というものがある。「空白のせりふ」というのは、全く何も喋らないけれども、喋る以上に語りかける「せりふ」であって、これはおそらく新劇には全くない。ただ木下順二さんの「夕鶴」にだけはそういう「空白のせりふ」があると申しました。山本安英さんの「夕鶴」が与ひょうの「お金が欲しい、都へ行きたい」という、袋に入れている、金づつみを持ってきまして、小判をざらざらーっと落とします時に、つうが放心状態になりまして、「あゝ、この金が欲しいんだな、こんなものが欲しいから私に鶴の羽衣を織れというんだな」という心理状態を無言で放心して、そのことを非常によく解らせるところがあります。これは六代目菊五郎の寺子屋の松王の首実験とか、暗闇の丑松がおよねの自殺をきいて、兄貴分であります四郎兵衛に対する憎しみとおよねへの愛情とで真空状態になる、あの空白状態といったようなものに相当するわけです。「空白のせりふ」です。これは、私は、ヨーロッパ演劇或いはあの京劇、近代の新劇、そういうものにはないと思います。このように「無い」ということの一つの「型」が日本にはあるのではないか、と思うんです。それは、ジャズというのが、楽譜の譜面通りでなく、非常に大きな約束事だけがあって、主題の演奏というものはあるわけですけれども、途中は実にアドリブで、その場におけるところの即興で演奏をするというのがジャズだそうでありますけれども、まあそういうのもやはり、「型」というものがない、ということがジャズの一つの「型」ではないか、ということが考えられますので、これはまあ先程田中さんが問題にされた、「間」というか「気」というか、そういうものの「型」ということになっていくのではないでしょうか、と思うんでありま

す。まあ、いずれにしましても、それは先程から森岡さんやそれから東山さん、そしてまた上原さんから論じられましたような、このパターンであるとかスタイルであるとかタイプであるとか、そういう問題は、もう既にいろんな人によりまして言われてもきております。例えばトインビーの“A Study of History”の文化圏という、これも文化を規定しておりますような一つの「型」というものだと考えられておりまして、非常に雄大な「型」論であろうと思います。和辻哲郎の『風土』なんかも、西洋の牧場様式の風土が決定します文化の型とか、或いは極東の季節風帯の文化が日本のいろんな文化を規定しているのだ、というような「型」論、それからまあ私はもっと雄大な「型」というのがおそらく日本の、例えば高松塚古墳の天井絵の二十八宿の星の問題でありますとか、それから今忘れ去られております問題が非常に多いわけですが、陰陽五行の問題なぞは、これは易とか何かとも関係して、非常に雄大な、北半球における、しかも極東の「文化の型」というものがあったように思われるんです。北半球では、南に向かって天子がいて、そうすると左の方の東から太陽、月が昇りまして、そして西へ没します。それで左が尊くて右が劣等であるという思想がずっと早くからでてきて、それが漢代になりましてはじめて反対に考えられるようになります。これは趙翼（ちょうよく）の『陔余叢考』の中国の考証学の研究ですけれども、漢代にはじめて、中国のアンシャン・レジームを批判してそれとは違ったことを、自分達の立場にするというようなことをしたのが、最初です。それが漢代でありました。おそらくこれは漢代になってはじめて中国では水稲耕作地帯からの支配者が、畑作と牧畜の経済によって成立しておりましたダイナスティを倒して、そして、皇帝に就いたのが、劉邦でした。漢の高祖劉邦は沛の地方つまり水田稲作地帯から興ってきました。水稲耕作経済による政府ができたことは非常に大きな転換期だったといえましょう。秦の始皇帝それから項羽、そういう王朝を否定して、そして漢文化ができた。それで左より右の方がいい、それで左遷という言葉もできたわけです。大体は、その頃までに成立した中国の「文化の型」の決め方というようなものは、私は易の思想にしましても、詩経にしましても、それから陰陽五行説の、相生説、相勝説いずれにしましても、二十八宿とか、十二支とか、十干とかいったような、そういう「文化の型」は、北半球の中国、日本それからずっと東洋

の文化を規定しております。今は忘れ去られてしまっているんですが、何故お稲荷さんの鳥居が赤いのか、と、いうようなことも全部陰陽五行説で説明できるんです。多くの民俗学者が、もうそんな陰陽五行なんてことを知らないで、民俗学者なんていうのは、そういう古い民俗がそういうことになっているんだということを知らないで、調査ばっかりして(笑)、聞き伝えでそうだと思い込んじゃっているものですから、「文化の型」というものは、そういう今の人達が伝えているなんていうもっと以前の非常に雄大な、そういう人類文化の築いてきた伝統の「型」というものがやっぱりあるんだろうと思います。吉野裕子さんの陰陽五行の研究は非常に雄大な「文化の型」を見ようとしているんです。吉野裕子さん、お稲荷さんの鳥居が赤いというのは、陰陽五行説で赤くなきゃいけないことを論証しています。そういう意味で私は、野口さんから南十字星の絵葉書をシンガポールにおられる時に頂いて、南十字星の星を見ますと北半球とは全く違った星のあり方が見えまして、こういうところに住んでおりますと「文化の型」というものも違ってくるように思いました。まあそういうことでございますので、「文化の型」は今日はあんまり早くに、こちんまりと「型」とはこうだといったようなことを決めてしまわないで、やはりもう少し時間をかけて、いろんな立場から、こういう問題、こういう問題がある、といったことで、成程こんなことを考えていたけれども、これはあんまりせっかちだった、というようなことになっていった方がいいのではないだろうかと、私は考えて参りました。そのためそれぞれの方に、「型」にはめるような形でお話をして頂くようなことは(笑)、全然申し上げないでいたんです。その方が実りがあるんじゃないかと考えて参ったんです。例えば、ドイツなんかはもともとゲルマン民族は多神教徒だったわけですが、それがグレートマイグレーションによりまして、どんどん移動してきたあと、ローマ教会に完全に教化されてしまいまして、そして、一神教になるわけですな。ですけども、小沢君の研究なんかによりますと、ジゼルというバレエなんか見ますと、あれはドイツのゲルマン民族の非常に古い時代の信仰がリバイバルしている、そういうことだといっています。ですから「文化の型」論、「型」というものは、いろんな形で文化交流とか、それから、征服とか、或いは自分の方で征服するとかいうようなことで、単純にはいかないだろう。そういう単純に

はいかないような、例えばそのお稲荷さんの鳥居が赤いといったようなことを、調査で決めるなんてことをやってたんじゃあ、本当の文化はわからないわけですな。まあ、そういうことですから、「型」は皆様方のような頭脳のすごい人によって、やっぱり新たにいろんな角度から研究し合うと、こういうことが必要なのではないだろうか、と思うんです。そこで私の担当、総括は終ったんでありますが、この要求を致します時に、それぞれの担当の「型」の研究分担というのがありますので、それだけここで読み上げます。私が「芸能文化の型」、それから中西さんが「詩歌の原型」、上原さんが「古代美術の型」、それから桜庭さんが「絵画の型」、大庭さんが「ドラマトゥルギーの型」、石川さんが「大衆文化の型」、伊藤さんが「他界観の型」、朽尾さんが「生死観の型」、尾形さんが「中央と地方の文化交流の型」、我妻さんが「外来文化摂取の型」、東山健吾さんが「中国文化の型」、斎藤忍随さんが「ギリシア文化の型」、野口さんが「東南アジア文化の型」、それから上野さんが「アイルランド文化の型」、杉山さんが「アメリカ文化の型」、こういうことです。

それではこれから、それぞれの方が「文化の型」をどう考えるかというところで、まあ私は、芸能の「文化の型」というようなものなんですが、日本の芸能の「文化の型」は先程申しましたような歌舞伎の「型」とか、いろんな「型」がございます。これはまあ非常な特色の一つであろうと思うのですが、この「型」は、大抵秘伝というような形で伝えられて参りました。秘伝はですからある時に、非常に優れた名人が作りあげました。一つの演出法とか演技の仕方とか、そういうものを伝えているものでありますが、これは世阿弥の『風姿花伝』の中にも秘伝のことがいろいろ書かれておりますけれども、例えば私が「勧進帳」を致しました時に、やっぱり秘伝と申しまして成程これは素晴らしいと思いましたのは、飛び六方の所で、下座の音楽に合わせましていよいよぱっと手を前へ出してそして足を、左足をかがめてですね、飛んでゆくところですね、そこのところで親指と小指だけに力を入れてぱっとこう出すと、そして花道の板をたたくようなつもりで前へ出すんだという、これは秘伝なんですけれども、成程そうすると手がよく開きます。それから足は膝をできるだけ広く開いて踵を肛門にくっつける。そして前に飛び出すんだと、そうしないと足がぶらぶらしてたんじゃあまことにみっともないと

いうことですが、これなどは、歌舞伎の秘伝と致しまして非常に見事な、私は今も生きて使って成程というようなものでございますが、そういう点が芸能文化には沢山ございましてですね、日本の文化の一つの特色になっていると思います。

園芸なんかでもそうでありまして、肥後椿に山取りの法というのがあります。山で非常に形の変わった椿の木をずばっとこう切ってきまして、根っ子の方を鉢の中へ根も何もないのを埋めまして、上部の所へ芽を一つだけ接ぐんです。そうするとこの芽の生命力によりまして、根がでてきて、接ぎ芽が芽生えてくるそうです。これは一芽接がないと根は出ないそうですけれども、そういう形で芽を出しまして、大きな木に肥後椿を咲かせるというのが、肥後熊本で幕末に発明された山取り法というんです。こういうのは、変化朝顔をつくりますこととか、或いは陶芸の浜田庄司さんが独特のブルーを作られますけれども、あれも温度が何度になる、というのをちゃんとイーゼルというので計測しまして、ああ今千二百度だとか千三百度だとかというのがわかるわけですね。で、そういう温度になった時に、食塩を握っていましてばあーっと投げ込むと当たったところで、食塩のところがブルーになるのです。それは非常に巧く投げつけないと、うまくないそうですけれども、浜田庄司という方は本当に天才でした。あの人はそういう特技を秘伝なんかにしないで民芸だからということで誰でも今はやる方法ですが、そういう一つのものをつくり出しますと、やがてそれが「型」ということになります。日本では例えばナポレオン戦争で向うの砲術が非常に発展しましたのを、日本へ輸入しますと、翻訳して『高島砲伝書』というものをつくります。そしてそれが日本の文化の世界では、そういうものも、芸能と考えまして、鉄砲の打ち方とか、火薬の製法などを全部秘伝にしてしまうわけです。全部伝授しまして、それを伝授するということになります。そして入門すると血判を押させて師弟の誓約をいたしました。しないと教えないというようなのが、まあ日本のあらゆる文化領域に於ける、伝統的な「型」つまり、「文化の型」というものだということがいえると思います。まあ芸能の文化というものは、そういう意味で極めて洗練された意味をも持っておりますけれども、一面では非常に閉鎖的であるという、そういう特色を持っています。